

保育士の困難感のキャリア間の比較

緒方 麻里*・赤間 健一**

Comparative analysis of Feeling of Difficulties of
Nursery Teachers among Career Stages

Mari OGATA and Kenichi AKAMA

概要

本研究では、保育施設の管理職から見た保育者の経験年数の基準を明確にし、その基準に基づき保育士のキャリアごとの困難感に関する特徴を検討することを目的とした。管理職を対象に調査を行い、保育士のキャリアは、新人保育士が経験年数5年未満、中堅保育士が経験年数5年以上12年未満、熟練保育士が経験年数12年以上とされた。次に、保育士を対象にキャリアごとの困難感を調査した結果、新人保育士は全体的に困難感が高く、熟練保育士は全体的に困難感が低かった。中堅保育士は高い困難感と低い困難感があった。つまり、新人保育士は経験が少なく、熟練保育士は経験が多いことが困難感に起因し、中堅保育士はある程度の経験を有していることが困難感に起因していることが考えられる。このように、各キャリアで困難感の内容や程度の相違が得られ、保育士のキャリアごとの困難感が具体化された。一方で困難感は、キャリアによって質が異なり、他の要因が影響している可能性があることが示唆された。

キーワード：保育士、経験年数、キャリア、困難感

問題・目的

子どもや子育てを取り巻く環境の変化により保育者の専門性の向上が求められている（神長，2015）。しかし、保育者に求められる専門性は多様化、複雑化するため、保育者自身は保育者の専門性について自覚することが難しい（浜口，2014）。

保育者の専門性の向上について、高濱（2000）は、経験年数が長いほど知識が増加するだけでなく知識が構造化され、経験年数に伴い保育者の熟達化のプロセスを進めることを示した。杉村・桐山（1991）は指導方法について、経験によって抽象化され統合されていくと述べたように、保育者の熟達化には経験年数が影響していることが示唆された。吉田・片山・高橋・西山（2015）は、保育者の気付きに関連して、経験を重ねるにつれ、子どもの表面に表れた行動だけでなく、その行動が持つ意味に気付きを得るようになることを示した。堀（1997）は、保育者の指導方法は、一つの時点での対応から見通しを持った対応へと形成され、経験を重ねた保育者は、自身の指導方法に疑問を持ち指導の適切性を判断することや他の職員との連携を取り状況を見極めるなどしながら指導方法を使い分けるようになること、経験年数が長い程、時間的展望が長くなるように変化することを明示した。

池田（2015）は、保育者は省察を通して保育者自身の子どもの解釈・意味づけの方法を整理し、子ども理解の特質を描き出すようになり、保育者の課題意識が子ども理解を促進させ、子どもを理解することが保育者自身の成長を促すと示唆した。また、山川（2009）は、保育者は経験を積むことで、より客観的に自分自身を振り返るようになり、自分自身の失敗も成長するものと客観的に捉え、保育をポジティブな視点からまとまりをもって捉え、保育の内容を語る事ができていたと明示した。

先行研究の結果からは、経験を積むことで、保育者の専門性が向上することが示されているが、経験の質までは問われていない。しかし、これらの研究結果を概観すると、ただ経験を積むだけでなく、どのような経験をしているかが保育者の専門性の向上に重要であり、単純な経験年数ではなく、経験の質が問われると考えられる。

保育者の専門性の向上には経験が影響していることが示されているが、保育者の専門性以外にも経験年数の影響があることが示されている。例えば、保育者の経験年数によるアイデンティティの形成過程に着目した足立・柴崎（2010）は、保育者のアイデンティティ形成過程において、新人期（0年）はアイデンティティの芽生えと混乱の時期であり、初任期（1年から2年）は保育者ア

* ごじょう保育所

** 福岡女学院大学

アイデンティティの構築と保育者としての充実感を得ようになり、中堅期（3年から15年）になると、アイデンティティの再混乱と再構築による揺らぎの時期となり、熟練期（16年以上）には、保育者アイデンティティの再構築あるいは再構築できない状態となることを示した。つまり、保育経験を積むことで理想の保育者像が明確となっていく一方で、社会の変化や保育制度（法律）の改革による保育ニーズの多様化が熟練保育者に意識（保育者アイデンティティ）変容の必要性を迫ることを指摘した。吉田他（2015）は、初任保育者（0年から5年）、中堅保育者（6年から15年）、熟練保育者（16年以上）の中で、新任保育者は子どもの姿をどう受けとめるのかについて気付き体験を得ている点が特徴であることを示した。それに対し、保育経験を積むにつれ、とりわけ中堅保育者は、子どもを受けとめ理解することの重要性を感じる場面が益々多くなり、実感として捉え、試行錯誤しながら新たな気付きへと発展させていき、熟練保育者になると、個々の子どもの違いを前提として受けとめていると示唆した。

このように、保育者の専門性の向上だけでなく、保育者のアイデンティティの形成や子ども理解といった保育者の成長には経験年数の影響が示されており、先行研究によって経験年数の設定範囲は様々であるが、保育者を新人期（新任期）、中堅期、熟練期と分け、それぞれの時期における特徴が示されている。多様な観点から保育者の専門性や成長プロセスを検討するために経験年数に応じて保育者の分類がされてきたが、経験年数ごとに分類された保育者の経験年数の区分は研究により異なり、統一性がない。新人保育者、中堅保育者、熟練保育者を分類する年数区分の基準の設定については、調査から得られたデータを基に年数区分を分類した研究や先行研究を参考に保育者の年数区分を位置付けている研究が多く見られた。経験年数区分の統一性がないため、それぞれの段階における明確な特徴が見えてこないことが問題にあげられる。しかし、経験年数を統一することによって、経験年数に伴う各段階における課題や課題に応じた支援に有効な検討が可能になると考えられる。そのため、新人期、中堅期、熟練期それぞれの保育者の経験年数の区分を明確にする必要がある。

そこで本研究では、新人保育者、中堅保育者、熟練保育者の3つの保育者の経験年数区分をキャリアと呼ぶこととし、保育施設の管理職の認知に基づく年数区分を作成し、使用する。保育施設の園長には、保育の質の向上に対応することが社会から求められている（田中、2013）。また、保育施設の園長は、園の運営を見通した保育者の捉え方を持っている（櫻井、2019）。つまり、保育施設における管理職は組織全体から保育者の存在を把握しているため、管理職の認知に基づいた年数区分を用いることは、保育士の経験年数に応じた保育者の特徴の実態を把握する上で、これまでに用いられてきた区分よ

りも有用であると考えられる。

また、保育者が経験年数を重ねることによってどのような経験をし、経験をどのように受けとめるかは、保育者の専門的成長に影響することが示唆されてきた（例えば、片岡、2014；吉田他、2015）。

加藤・安藤（2013）は、職務上の困難感に関して、経験年数5年未満の新任保育者と経験年数5年以上の中堅・ベテラン保育者の比較から、新人保育者は保育技術の未熟さや専門的な知識の不足、経験の少なさからくる困難感を抱えるため、中堅・ベテラン保育者に比べて成長を感じにくいのではないかと推察した。また、経験年数に伴い担う役割が異なることから困難感が変化することに加え、保育観や保育方法の相違による保育に対する考え方や方法は個人で異なるため、共通理解を図ることは容易でない状況が困難感に結びついていると示唆した。さらに、白石（2019）は、保育経験年数が1年から3年の初心者は、保育スキルの未熟さによる焦りがストレスナーになり、保育経験4年から9年の中堅保育者は、役割の曖昧さによるストレスや初心者とベテラン保育者の板挟みがストレスナーとなるが、保育経験10年以上のベテラン保育者は、責任の重さがストレスナーになっていることを示した。とりわけ保育所保育士は、自己を取り巻く環境や他者との関係において困難を感じている（小原・入江・白川・上垣内・酒井・内藤・吉村、2013）。つまり、保育所保育士は日々の業務の中で困難感を抱き、その困難感は経験年数に伴う立場や状況によって変化している。そのため、キャリアごとの困難感の比較を行い、共通点や差異点を明確にすることによってそれぞれのキャリアにおける困難感の特徴の実態が明らかになると考えられる。

そこで本研究では、保育士の職務上の困難感を調査し、各キャリアで抱えている困難感の相違を比較することで、各キャリアにおける特徴を明らかにする。

以上から、本研究では、管理職から見た保育士の経験年数の基準を明らかにし、その基準に基づき保育士のキャリアごとの困難感に関する特徴を検討することを目的とする。

予備調査

(1) 目的

管理職に対して、保育者の経験年数を尋ねることによって、管理職の認知に基づく保育士のキャリアを定義することを目的とする。

(2) 方法

調査対象者 A県、B県、C県の保育所26園の管理職57名を対象に調査を行った。

調査内容 フェイスシートで、保育所において管理職にあたる所長・園長、主任等に対して、性別、職位、年齢、保育者経験年数及び管理職経験年数について

尋ねた。

保育者の経験年数 管理職に対して新人保育者、中堅保育者、熟練保育者のそれぞれがどの程度の経験年数を有すると考えているかについて回答を求めた。

調査時期 2020年6月中旬から7月下旬までの時期に実施した。

手続き 郵送にて質問紙を配布し、調査を実施した。回答後は質問紙を封筒に各自で封入し、保育所毎にまとめ、返送をお願いし回収した。

倫理的配慮 調査協力者に、調査の目的、回答の自由、回答中断の権利、情報の取り扱いなど、調査倫理に関する説明を明記し、調査依頼をした管理職及び保育士に調査方法ならびに調査内容の同意を得て、質問紙への回答を求めた。福岡女学院大学研究倫理審査委員会において、調査に関する倫理審査を受け、承認された（審査番号20005）。

(3) 結果

管理職57名を対象に調査を行い、回収率93.0%（53名）であった。不備があったデータを除き、管理職50名のデータを分析対象とした分析対象とした管理職の属性は、50名のうち女性39名、男性11名、職位は、園長21名、副園長3名、主任22名、その他2名、不明2名であった。年齢は、23歳から76歳、不明1名（平均年齢52.2歳、 $SD = 10.6$ ）であった。保育者経験年数は、0年から36年、不明2名（平均保育者経験年数18.9年、 $SD = 10.1$ ）、管理職経験年数1年から40年、不明5名（平均管理職年数10.4年、 $SD = 9.6$ ）であった。

保育者の経験年数について、新人保育者は何年未満の経験年数を有するのか、中堅保育者は何年から何年の経験年数を有するのか、熟練保育者は何年以上の経験年数を有するのかについて回答を求めた。その結果、管理職から見た保育者のキャリアは、新人保育者の上限（ $M = 2.74$ 、 $SD = 0.14$ 、 $95\%CI = [2.45, 3.03]$ 、 $Min = 1$ 、 $Max = 5$ ）、中堅保育者の下限（ $M = 4.61$ 、 $SD = 0.33$ 、 $95\%CI = [3.94, 5.28]$ 、 $Min = 2$ 、 $Max = 15$ ）、中堅保育者の上限（ $M = 9.54$ 、 $SD = 0.53$ 、 $95\%CI = [8.48, 10.61]$ 、 $Min = 5$ 、 $Max = 20$ ）、熟練保育者の下限（ $M = 11.57$ 、 $SD = 0.60$ 、 $95\%CI = [10.36, 12.77]$ 、 $Min = 5$ 、 $Max = 20$ ）であった。

経験年数によってキャリアに差があるかを検討するために経験年数とキャリアの一要因分散分析を行った結果、経験年数の主効果は有意であった（ $F(3, 135) = 173.46$ 、 $p < .001$ ）。そのため、Bonferroni法により多重比較を行った結果、新人保育者の上限、中堅保育者の下限、中堅保育者の上限、熟練保育者の下限の間に有意な差があった（ $p < .001$ ）。新人保育者の上限より中堅保育者の下限が高く、中堅保育者の下限より中堅保育者の上限が高く、中堅保育者の上限より熟練保育者の下限が高かった。

(4) 考察

本調査では、管理職に対して保育者の経験年数を尋ね、管理職の認知に基づく保育士のキャリアを検討した。分析の結果、管理職から見た保育者のキャリアは、新人保育者の上限がおおよそ3年、中堅保育者の下限がおおよそ5年、中堅保育者の上限がおおよそ10年、熟練保育者の下限がおおよそ12年であった。加えて、信頼区間の範囲が狭かったため、多く保育所で管理職の認知は共通していると考えられる。また、分散分析による経験年数の主効果は有意であり、多重比較により新人保育者の上限、中堅保育者の下限、中堅保育者の上限、熟練保育者の下限の間には有意な差があった。

高濱（2000）は、2年から4年を初心者、5年から10年を中堅者、11年以上を経験者とし、保育者の熟達化のプロセスの検討を行い、保育者は5年以上の経験を積むと、ある一定の知識を獲得することを示した。加えて、加藤・安藤（2013）は、ストレスの観点や退職からの観点から5年未満を新任保育者、経験年数5年以上を中堅・ベテラン保育者とし、経験年数による困難感の程度が異なることを示した。以上から、経験年数5年は、新人保育者上と中堅保育者の境であると捉えられる。

中堅保育者と熟練保育者の境については、先行研究において保育者のキャリアに統一性がなかった（例えば、足立・柴崎，2010；吉田他，2015）が、先行研究と分析結果を踏まえ、12年を中堅保育者と熟練保育者の境とする。

従って、経験年数5年と12年は、保育者の経験年数を分類する上での境である捉え、保育士のキャリアは、新人保育士が経験年数5年未満、中堅保育士が経験年数5年以上12年未満、熟練保育士が経験年数12年以上であると定義する。

本調査

(1) 目的

予備調査で分類した経験年数により保育士を分類し、新人保育士、中堅保育士、熟練保育士それぞれがどのような困難感をどの程度抱いているのかを比較し、キャリアごとの困難感の特徴を検討する。

(2) 方法

調査対象者 A県、B県、C県の保育所18園の保育士415名を対象に調査を行った。

調査内容 フェイスシートにて、性別、年齢、保育者経験総合年数、現在の勤務園年数、勤務形態、現在の担当クラス、経験のある担当クラス、経験ある園数、保育施設経験、資格取得機関について回答を求めた。

保育者の職務上の困難感 加藤・安藤（2013）が作成した、専門的な知識や力量等の保育に関する「保育の困難感」（6項目）、書類や行事等に関する「仕事の大変さ」（4項目）、職員同士や保護者との関係性等

table 1 キャリア別の平均値、標準偏差

	新人保育士 (n=72)		中堅保育士 (n=64)		熟練保育士 (n=128)	
	M	SD	M	SD	M	SD
保育の困難感	3.85	0.61	3.36	0.67	3.09	0.66
仕事の大変さ	3.80	0.65	3.72	0.80	3.49	0.85
人間関係の困難感	2.75	0.75	2.88	0.78	2.81	0.81
職員間の理解不足	2.40	0.80	2.74	0.82	2.51	0.80

に関する「人間関係の困難感」(4項目)、福利厚生や保育方針等に関する「職員間の理解不足」(3項目)の4つの下位尺度から構成される保育者の職務上の困難感に関する尺度(尺度として使用できない2つの下位尺度は除いた)、計17項目を使用し、1. そう思わない、から、5. そう思う、までの5件法で回答を求めた。

調査時期 2020年6月中旬から7月下旬までの時期に実施した。

手続き 郵送にて質問紙を配布し、調査を実施した。回答後は質問紙を封筒に各自で封入し、保育所毎にまとめ、返送をお願いし回収した。

倫理的配慮 調査協力者に、調査の目的、回答の自由、回答中断の権利、情報の取り扱いなど、調査倫理に関する説明を明記し、調査依頼をした管理職及び保育士に調査方法ならびに調査内容の同意を得て、質問紙への回答を求めた。福岡女学院大学研究倫理審査委員会において、調査に関する倫理審査を受け、承認された(審査番号20005)。

(3) 結果

保育士415名を対象に調査を行い、回収率71.1% (295名)であった。295名のうち女性281名、男性10名、不明4名、年齢は、20歳から75歳、不明10名(平均年齢37.3歳、 $SD = 12.6$)であった。保育者経験総合年数は、0年から46年、不明9名(平均保育者経験年数13.4年、 $SD = 10.6$)であった。現在の勤務園での経験年数は、1年から39年、不明11名(平均勤務経験年数8.2年、 $SD = 8.3$)であった。勤務形態は、常勤保育士227名、非常勤保育士44名、不明24名であった。現在の担当クラスは、0歳児クラス54名、1歳児クラス31名、2歳児クラス31名、3歳児クラス12名、4歳児クラス11名、5歳児クラス10名、0,1歳児クラス7名、1,2歳児クラス41名、2,3,4歳児クラス1名、3,4,5歳児クラス41名、フリー担当41名、一時預かり担当1名、不明14名であった。経験のある担当クラスは、0歳児クラス担当経験あり212名、1歳児クラス担当経験あり240名、2歳児クラス担当経験あり244名、3歳児クラス担当経験あり182名、4歳児クラス担当経験あり171名、5歳児クラス担当経験あり169名であった。経験のある園数は、0園2名、1園128名、

2園66名、3園44名、4園19名、5園11名、6園8名、7園1名、8園1名、11園1名、不明14名であった。保育施設経験は、幼稚園勤務経験あり42名(5年から18年、平均経験年数2.1年、 $SD = 2.7$)、なし224名、不明29名、保育所勤務経験あり269名(1年から42年、平均経験年数11.9年、 $SD = 9.97$)、なし2名、不明24名、こども園勤務経験あり8名(1年から12年、平均経験年数0.13年、 $SD = 0.96$)、なし261名、不明26名であった。資格取得機関は、4年制大学52名、短期大学186名、専門学校30名、保育士試験12名、その他(4年制大学、短期大学、専門学校、保育士試験、編入の複数回答)12名、不明3名であった。

次に、予備調査の結果に基づき各キャリアに分類した結果、保育士の分析対象人数295名の内、不明9名を除き、5年未満の経験年数を有する新人保育士は77名、5年以上から12年未満の経験年数を有する中堅保育士は70名、12年以上の経験年数を有する熟練保育士は139名であった。

保育者の職務上の困難感に関する質問項目の4つの下位尺度のCronbachの α 係数を算出した結果、保育の困難感は、.74、仕事の大変さは、.73、人間関係の困難感は、.68、職員間の理解不足は、.63であり、尺度の信頼性が確認された。

また、保育者の職務上の困難感とキャリアの関連について、保育者の職務上の困難感に関する項目において、無回答のデータは除外し、264名(新人保育士72名、中堅保育士64名、熟練保育士128名)を対象に分析を行った。

キャリア別の保育の困難感、仕事の大変さ、人間関係の困難感、職員間の理解不足について基礎統計量をTable 1に示した。

キャリアによって困難感に差があるのか、また困難感の間に差があるかを検討するために、困難感(保育の困難感、仕事の大変さ、人間関係の困難感、職員間の理解不足)とキャリア(新人保育士、中堅保育士、熟練保育士)の二要因分散分析を行った。その結果、困難感とキャリアの交互作用は有意であった($F(6, 783) = 10.78, p < .001$)。困難感の主効果は有意であった($F(3, 783) = 173.27, p < .001$)。キャリアの主効果は有意であった($F(2, 261) = 5.15, p < .01$)。交互作用が有意であっ

たため単純主効果の検定を行った。

困難感におけるキャリアの単純主効果の検定の結果、保育の困難感 ($F(2, 261) = 32.11, p < .001$)、仕事の大変さ ($F(2, 261) = 3.98, p < .05$)、職員間の理解不足 ($F(2, 261) = 3.16, p < .05$) においてキャリアの単純主効果が有意であった。人間関係の困難感、キャリアの単純主効果が有意ではなかった ($F(2, 261) = 0.15, n.s.$)。単純主効果が有意であったため Bonferroni 法により有意であった保育の困難感、仕事の大変さ、職員間の理解不足の多重比較を行った。その結果、保育の困難感、新人保育士が中堅保育士と熟練保育士より高く、中堅保育士が熟練保育士より高かった。仕事の大変さは、新人保育士が熟練保育士より高かった。新人保育士と中堅保育士、中堅保育士と熟練保育士の間に有意な差はなかった。職員間の理解不足は、中堅保育士が新人保育士より高かった。新人保育士と熟練保育士、中堅保育士と熟練保育士の間に有意な差はなかった。

キャリアにおける困難感の単純主効果の検定の結果、新人保育士 ($F(3, 783) = 102.67, p < .001$)、中堅保育士 ($F(2, 783) = 33.95, p < .001$)、熟練保育士 ($F(2, 783) = 59.05, p < .001$) のすべてにおいて困難感の単純主効果が有意であった。単純主効果が有意であったため Bonferroni 法により多重比較を行った。その結果、新人保育士は、保育の困難感が職員間の理解不足より高く、仕事の大変さが職員間の理解不足より高かった。保育の困難感と仕事の大変さの間に有意な差はなかった。中堅保育士は、保育の困難感が職員間の理解不足より高く、仕事の大変さが保育の困難感と職員間の理解不足より高かった。熟練保育士は、保育の困難感が職員間の理解不足より高く、仕事の大変さが保育の困難感と職員間の理解不足より高かった。

(4) 考察

本研究では、保育士が抱えている困難感について、キャリアごとの特徴を検討した。困難感とキャリアの二要因分散分析の結果、困難感とキャリアの交互作用は有意であり、困難感の主効果とキャリアの主効果は有意であった。交互作用が有意であったため単純主効果の検定を行った。困難感におけるキャリアの単純主効果の検定の結果、保育の困難感、仕事の大変さ、職員間の理解不足においてキャリアの単純主効果が有意であり、人間関係の困難感には有意ではなかった。

保育の困難感、仕事の大変さ、職員間の理解不足の多重比較の結果、保育の困難感、新人保育士が中堅保育士と熟練保育士より高く、中堅保育士が熟練保育士より高かった。つまり、新人保育士の保育の困難感が一番高かった。そして、保育の困難感において全キャリア間で差があった理由として、新人保育士は経験年数が浅いため、中堅保育士や熟練保育士に比べてできることが少なく、中堅保育士、熟練保育士と経験年数を重ねていく

ことによって保育に関してできることが増えていくと考えられる。経験年数に伴い保育に関する知識や技術は、内容や量、使われ方が異なる(杉村・桐山, 1991; 高濱, 2000)。そのため、経験年数を重ねることによって専門的知識や力量等保育に関して経験による保育士への影響が生じていると推察される。

仕事の大変さは、新人保育士が熟練保育士より高く、新人保育士と中堅保育士、中堅保育士と熟練保育士の間に有意な差はなかった。仕事の大変さは、書類や行事、保育の準備や支援を要する子どもへの対応といった内容であり、各保育所独自のものが想定されるため、保育者養成校での学びや実習等では修得しなかった内容が多く、実際に保育者として保育所等に勤務するようになって初めて修得していくものや、経験によって修得していくものであることが考えられる。保育現場には様々なコンテキストが存在するため(堀, 1997)、新人保育士にとっては、初めての経験が多く、経験を積むことによって得ていく内容であり、新人保育士と熟練保育士の間に差が生じたと考えられる。仕事の大変さに関する職務内容は、キャリアによって大幅に増減するわけではなく、時間を有することが推測される。

職員間の理解不足は、中堅保育士が新人保育士より高かった。新人保育士と熟練保育士、中堅保育士と熟練保育士の間に有意な差はなかった。このことから、職員間での共通理解や福利厚生といった保育士集団による組織的な内容の認識に差が生じていることが考えられる。中堅保育士になると組織の中で任せられる職務が新人期よりも増えることが推測され、困難感、新人保育士より中堅保育士が高く、中堅保育士と熟練保育士の間には差がなかったことから、中堅保育士は新人保育士より経験年数を重ねたことによって、自身の考えや意図をより明確に持つようになり、組織における困難感が高くなっていることが示唆される。つまり、経験に伴う増減が生じるのではなく、困難さの理由が異なることが考えられる。職場環境や職務状況の違いが保育者のメンタルヘルスに異なる影響を与えていると考えられる(加藤・安藤, 2015)。

一方で、人間関係の困難感については、キャリアによる差がなかった。保育士全体として同程度の困難感を抱えており、キャリアとは無関係であることが考えられる。経験による困難感の高さへの影響は生じないと推察される。これは加藤・安藤(2013)が示した同様の結果であり、人間関係に関する困難感については、経験年数に関わらずどの保育士も抱える困難感であることが確認された。

次に、キャリアにおける困難感の単純主効果の検定の結果、新人保育士、中堅保育士、熟練保育士のすべてにおいて困難感の単純主効果が有意であったため、多重比較を行った。新人保育士は、保育の困難感が職員間の理解不足より高く、仕事の大変さが職員間の理解不足より

り高かった。そして保育の困難感と仕事の大変さは差がなかったことから、同程度の困難感を抱いていると考えられる。つまり、新人保育士は保育士として子どものことや集団、クラスのことなどの保育に関して養成校で学んだことと実際の現場での状況に応じながら努力しようとし、それ故に困難感に繋がっていると推察される。従って、保育スキルの未熟さによる焦りがストレスになっていることが推察される(堀, 1997)。また、仕事の大変さが高かったことは、新人保育士が職場に慣れようと、保育現場に存在するコンテキストに対応しようと追われていると考えられる(堀, 1997)。

中堅保育士と熟練保育士は共に、保育の困難感が職員間の理解不足より高く、仕事の大変さが保育の困難感と職員間の理解不足より高かった。つまり、中堅保育士と熟練保育士は、ある程度の経験を積んでいるため、ある一定の知識を獲得していると考えられる(高濱, 2000)。また、中堅保育士と熟練保育士が同様の結果が得られたが、この点に、中堅保育士の概念の不明確さ(田中, 2011)に加え、先行研究の経験年数区分の統一性の難しさが生じていると推察される。他方、中堅保育士と熟練保育士の結果が同様であったことは、どちらも同様の困難感を抱いているということが考えられ、他の要因が影響している可能性がある。

本調査についてまとめると、困難感とキャリアの特徴について、新人保育士は、保育の困難感が最も高く、仕事の大変さ、職員の理解不足が順に高かった。仕事の大変さに関しては熟練保育士よりも高く、職員間の理解不足は中堅保育士よりも低かった。つまり、新人保育士は経験が少ないことに起因すると考えられ、経験が少ないために困難感を感じることに感じないことが生じると推察される。中堅保育士の保育の困難感は、新人保育士程高くなく、熟練保育士程低くはなかった。そして、仕事の大変さは、他の保育士との差がなく、職員間の理解不足は、新人保育士より高かった。つまり、経験を積み分けることが増えることによって、困難感を感じることに感じないことが生じると考えられる。そして、熟練保育士は、保育の困難感は他の保育士より低く、仕事の大変さは新人保育士より低かった。そして、職員間の理解不足では差がなかった。つまり、経験があるが故に、困難感は低いと考えられる。一方、中堅保育士と熟練保育士に関して、共に保育の困難感が職員間の理解不足より高く、仕事の大変さが保育の困難感と職員間の理解不足より高かった。つまり、中堅保育士と熟練保育士は、同様の困難感を抱いているが、困難感の質が異なることが考えられる。

以上から、本調査における保育士の困難感において、キャリアごとに感じている困難感の内容や程度に共通点と相違点があり、加藤・安藤(2013)と一致した。

まとめ

本研究では保育士をのみを対象とし、新人保育士、中堅保育士、熟練保育士の3つに分類したため、それぞれのキャリアにおける困難感がより具体化されたと言えるだろう。また、本研究における保育士の困難感は、経験年数に起因し、経験に伴い抱える困難感が異なるといった結果と、白石(2019)が明示したように、経験年数によってストレスが異なるといった見解を合わせると、経験年数に応じた支援の必要性が示唆された。しかし、支援する手立てを検討するには、さらに各キャリアの特徴の違いや原因を明らかにする必要性が考えられる。そこで、今後の課題として新たな要因を加え検討することによって、保育士の困難感に影響する要因が見えてくることが可能になると考えられる。

さらに、各キャリアの中で中堅保育士は、役割の曖昧さや初心者と熟練保育者の板挟みが中堅保育者のストレス者になり(白石, 2019)、新人期にはなかった難しさや熟練期のように上手いできないことが生じている可能性がある。従って、中堅保育士は他のキャリアに比べ独特の困難さや不安定さを抱えていることが推測される。加えて、中堅保育士の存在は新人保育士や熟練保育士を支える存在であると共に、中堅保育士の成長は保育施設において重要な役割を果たしているのではないかと考えられる。そのため、保育の質や保育士の専門性を検討していく上で、各キャリアの中でも特に中堅保育士に注目していく必要があるだろう。

引用文献

- 足立里美・柴崎正行(2010). 保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討—担任保育者に焦点をあてて—保育学研究, 48, 213-224.
- 浜口順子(2014). 平成期幼稚園教育要領と保育者の専門性教育学研究, 81, 66-77.
- 堀淳世(1997). 幼稚園教諭が語る指導方法—経験年数による違い—保育学研究, 35, 60-67.
- 池田竜介(2015). 日常の保育実践における保育者の子ども理解の特質—保育者が子どもを解釈・意味づけする省察の分析を通じて—保育学研究, 53, 6-16.
- 神長美津子(2015). 1. 展望: 専門職としての保育者 保育学研究, 53, 94-103.
- 片岡元子(2014). 保育者の「葛藤」とメンタリングに関する研究 香川大学教育実践総合研究, 28, 137-150.
- 加藤由美・安藤美華代(2013). 新任保育者の抱える職務上の困難感の要因に関する研究—新任保育者と中堅・ベテラン保育者および園長との比較—岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 154, 15-23.
- 加藤由美・安藤美華代(2015). 保育者のメンタルヘルスに関する国内外の研究の動向と展望—学校教員を対象とした研究を参考に—岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 159, 1-10.
- 小原敏郎・入江礼子・白川佳子・上垣内伸子・酒井幸子・内藤

- 知美・吉村香 (2013). 保育者の保育観に関する研究—保育経験年数、保育所・幼稚園の違いに着目して—保育士養成研究, 31, 57-66.
- 櫻井裕介 (2019). D 保育所における園長による主任保育者選定プロセスのTEM 分析 中村学園大学発達支援センター研究紀要, 10, 47-53.
- 白石京子 (2019). 経験年数別に見た保育者のストレス反応軽減に有効な支援の考察—ストレス反応とストレッサー、ソーシャルサポート、コーピングの関係—文教大学生生活科学研究, 41, 17-24.
- 杉村伸一郎・桐山雅子 (1991). 子どもの特性に応じた保育指導—Personal ATI Theory の実証的研究 教育心理学研究, 39, 31-39.
- 高濱裕子 (2000). 保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応 発達心理学研究, 11, 200-211.
- 田中まさ子 (2011). 保育者は子どもの学びをどう捉えるか—中堅保育士のキャリア発達の視点から—岐阜聖徳学園短期大学大学部紀要, 43, 85-102.
- 田中まさ子 (2013). 保育者の自己評価—園長の役割を中心に—岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 45, 13-34.
- 山川ひとみ (2009). 新人保育者の1年目から2年目への専門性向上の検討—幼稚園での半構造化面接から—保育学研究, 47, 31-41.
- 吉田満穂・片山美香・高橋敏之・西山修 (2015). 保育経験年数からみた気付き体験の特徴 岡山大学教師教育開発センター紀要, 5, 9-18.